

● シリーズ 私の見た日本 Vol.228

居住空間から見た日本の生活文化

武怡葦 (ム イウェイ)

1997年新疆生まれ。2021年西安建築科技大学卒業、
2023年～日本大学大学院芸術学研究所の若原研究室
所属 在学中

私は中国の西安から来た留学生です。現在、日本大学大学院芸術学研究所の若原研究室に所属しています。西安建築科技大学で空間デザインを学んでいましたが、以前から興味があった日本の建築を日本で学びたいと思い、思い切って東京での留学生生活を始めました。日本に到着したとき、成田空港からホテルに向かう車の窓から見える景色は、私にとって全てが新鮮で、まるで別世界のように感じました。車が走る高架道路のすぐ横にビルが迫ってきて、建物の間を縫うように移動しているかのような感覚がありました。ビルとビルの間隙は息を潜めたような静けさがあり、建物の間隔の狭さや距離感は、西安とは全く異なり、日本の都市がどれだけコンパクトにできているのかを肌で感じました。

到着してからしばらくの間、周囲の風景を観察する日々が続きました。東京の住宅地を歩くと、家と家が肩を寄せ合うように建てられて隣家との距離感が近い住宅や、道路に面する家々が街として現れました。窓や仕切りには外の空気感を感じながらもプライベート

な空間を作る工夫がなされているようです。これらは居住者が快適に過ごせるようになっているだけでなく、住人の個性を垣間見ることのできる空間だと思いました。このような住宅の配置やデザインを見るたびに、空間設計に対する細やかな配慮や、限られた土地でいかに住みやすくするかという工夫に感心しました。

日本の居住空間

日本での生活が始まってから、私はすでに4回引越しを経験しました。それぞれの部屋探しは簡単ではなく、物件サイトを使って気になる部屋をリストアップし、時間を見つけては内見を繰り返していました。

紹介される物件の多くは、リビング、ダイニング、キッチンが一体となり、同じ空間で食事をしたり、友達を招いて一緒におしゃべりしたりと、LDKの間取りが標準で、自然と生活が一つの空間に集まるような間取りになっていたことがとても印象に残っています。限られた空間で過ごす家族や友人との時間は、より一層お互いの距離感を縮めているように

感じ、日常の一部として“一緒にいる時間”を大切にしているということを感じました。初めて住んだ部屋はワンルームのLDK形式で、リビングがキッチンの延長線上にあり、壁もなく仕切りもない部屋でしたが、導線や収納などの暮らしの工夫がたくさん詰まっており、これからの暮らしについての想像がとても膨らむような空間だったことを今でも覚えています。

日本の居住空間について私が最も興味を持ったことは玄関の空間です。日本の玄関は、内と外を繋ぐ一種の“境界領域”のように感じられました。玄関に足を踏み入ると、まず段差があり、自然に靴を脱ぐ流れができています。以前私が日本人の友人の家を訪れた際も、玄関は小さな段差で内と外が区切られ、靴を脱いでから中に入ると、すぐに床の感触が足の裏に伝わってきました。玄関から一歩上がると、“内に入った”という安心感があり、自然と姿勢を正してしまうほどでした。

古民家から見える暮らしの工夫

建築の勉強をしているなかで、古民家への見学もいくつか行きました。

特に心に残っているのは、「土間」と呼ばれる空間です。農作業の道具が置かれた土間は、台所や作業場としての役割を持ち、家族が集まって作業をしている風景が浮かんできます。例えば、旧鈴木家住宅の土間では、大きな囲炉裏があって、家族みんなが囲炉裏を囲んで暖を取ったり、食事をしている場面が想像できました。土間に置かれた大きなかまどは調理のためではなく、和紙を作るためのものであることを知り、その多機能な使い方に驚きました。

また、囲炉裏の煙が部屋中にたちこめる様子を見学しながら、当時の日本人がどのようにして冬を過ごしていたのか、家族の絆がどれほど大切にされていたのかを感じ取ることができました。

加えて、土間は家と外をつなぐ重要なスペースであり、家族や村人が集まり、生活の一部

を共有する場所でもあります。

例えば、日本民家園にある旧江向家住宅では、広々とした三角屋根の下に、農作業のための空間が広がっており、居住空間と土間が柔らかく繋げる役割を果たしています。この土間は、農作業の終わりに泥や土を落とし、清潔な空間へと上がる前の“準備の場所”としての役割も果たしており、内と外を曖昧にしながらも、それぞれの役割をしっかりと果たしていることがわかります。

心理的な領域

日本の友人の家に招かれたときに、印象的だったのは「靴を脱ぐ」という行動がどれほど大切にされているかということでした。

友人の家に行くと、まず玄関で「お邪魔します」と言いながら靴を脱ぎ、そっと中に入ります。この「お邪魔します」という言葉には、自分が相手の私的な空間に入ることへの許可を求め、相手を尊重する気持ちが込められています。日本語には「土足で上がる」という表現がありますが、これは他人の領域に無遠慮に踏み込むことを意味します。そのため、靴を脱ぎ、家の中に入るとは単なる行為としてだけでなく、文化的な礼儀を体現し、靴を脱いでから「お邪魔します」と言うその瞬間、自然と身が引き締まるように感じるのでした。

この行動は日本人の間では当たり前のように行われていますが、初めて日本に来たときの私にとっては新鮮で、非常に意味深いものでした。日本では、土足で家に入ることが禁じられているだけでなく、相手に対しての礼儀が込められている点が重要です。こうした文化的な違いが、他人とのコミュニケーションを円滑にする大切な要素となっています。玄関という小さなスペースを通じて、人と人の距離が近づく瞬間を感じ取れることが、日本の住宅文化の魅力のひとつだと感じました。

私から見た居住空間の違い

中国での生活と比べると、日本の居住空間は非常に工夫に満ちており、限られた空間をどのように豊かに暮らしていくか、住人それぞれが考えているように感じます。また、日本の住居内でのコミュニケーションの場は比較的暮らしに溶け込んでいるのに対し、中

国の住居は各部屋が独立しており、家族がそれぞれの時間を持つことができるようになっています。この違いは、生活のなかで「一緒にいる時間」と「個々の時間」をどう大切にするか、文化的な価値観の違いを表しているように思えます。日本の居住文化において玄関や土間など内と外の区切りが強調されているのも、日本特有の「内と外」の文化を象徴であると感じています。

4年間の留学生生活を経て

日本での生活を重ねるうちに、私は日本の居住文化の奥深さを学ぶだけでなく、自分の日常に新たな価値観を取り入れることができました。また、日本の作法や言葉、暮らしを通じ、相手を尊重する心を育むことができました。日本で学んだこれらの経験は、今後の建築デザインに対する視点を豊かにし、さらなるインスピレーションを与えてくれることでしょう。



上/旧鈴木家住宅の土間 下/旧江向家住宅の囲炉裏



住宅地の夜景



井の頭の住宅の玄関